ナーシングコミットメント・セレモニー

看護学科2年次生を祝福

12月4日、1号館前Sテラスにクリスマス・イルミネーションが点灯した

10月7日、総合人間科学部看護学科のナーシングコミットメント・セレモニーが聖イグナチオ教会主聖堂で開催された。このセレモニーは、看護職を目指すにあたり、本学の精神と看護の技術を表す「手」に司祭から祝福を受けるもので、2年次生を対象に毎年10月に行われている。

校歌斉唱の後、石川ふみよ看護学科長が挨拶に立ち、「看護師は一人の専門職業に携わる者として両手と人間性とを用いて仕事をしている。温かい洞察力により人々のニーズを理解することがすぐに看護師の両手の働きとなってあらわれる」という文化人類学者マーガレット・ミードの言葉を紹介。「上智大学の教育精神『他者のために、他者とともに』に基づいて看護の知・技・心を育み、皆さんの手によってそれが実現されることを祈ります」と式辞を述べた。

一人ひとりに「手」の祝福が授けられた

看護職への新たな決意が述べられた

聖書朗読、司式者からのメッセージに続いて、李聖一神父とアントニウス・フィルマンシャー神父から、学生一人ひとりに「手」の祝福が授けられた。その後、「学術の灯」と「看護の灯」を表すメインキャンドルの灯りが、2人の4年次生によって2年次生のキャンドルに受け渡された。

2年次生代表の互優菜さんが「私たちはまだまだ未熟であり、この手でできることには限りがありますが、患者さんとの関わりで得た気づきや不安などに真摯に向き合い、看護を学ぶ者として与えられた責任を自覚し、祝福していただいたこの手を持って看護職への道を進んでいきたいです」と謝辞を述べた。

東京オリンピックメダリストから学ぶ

特別講義と競技体験会を実施

ダイバーシティ&インクルージョンを推進

10月22日、日本電気株式会社（NEC）と共同し、トップアスリートで東京オリンピックメダリストの野中生萌選手（スポーツクライミング）と堀米雄斗選手（スケートボード）を四谷キャンパスに招き、特別講義と競技体験イベントを実施した。

NECは、国籍や性別、障がいの有無などに関わらず、誰もが夢を抱き挑戦するきっかけを創るために、さまざまな活動を行っている。本学でも「他者のために、他者とともに」という教育精神のもと、ダイバーシティ&インクルージョンの推進に積極的に取り組んでいることから、今回のイベントを本学で開催することになった。

Go Beyondの高橋さん（右）と近藤さん

クライミングボードで競技を体験

プログラムの前半は、「世界に挑戦し活躍するために大切なこと」をテーマに、2人の選手による特別講義やトークセッションが行われた。野中選手は「まずは世界に飛び出して自分を知ることが大切。日本と世界の違いを知ることで自己理解が深まり、さらなる挑戦のための土台になっていく」と語った。堀米選手は「家族や仲間とのコミュニケーションの中で、オリジナリティのあるアイデアが生まれることも多い。うまくいかずに落ち込んだときは、『スケートボードが好き』という気持ちに立ち返り、純粋に楽しむようにしている」と話した。

この他にも、世界を舞台に挑戦する勝負強さの源や、大切にしている言葉に秘めた想いとエピソードが紹介された。

プログラム前半の最後は、スポーツを通じて多様性理解を推進する学生団体「Go Beyond」から、高橋晴香さん（経営2）と近藤来実さん（総社2）が参加学生を代表して登壇。団体の取り組みを発表したのち、選手らにキャリアに関する悩みやトップに立った後の目標に関する質問を投げかけた。両選手は、自らの経験をもとに丁寧に答え、学生たちにエールを送った。

プログラムの後半は会場を移し、本イベント用にクライミングボードとスケートボードパークが設置された1号館前で競技体験会を実施した。両選手が学生の手を取りながら競技のコツを伝授。パフォーマンスを実演する場面では、プロの巧みな技に会場から大きな拍手が上がった。参加した学生にとって、トップアスリートとの交流や、未経験のスポーツへの挑戦など、多くの刺激を受けた貴重な一日となった。

全国高校生英語弁論大会

「ジョン・ニッセル杯」を開催

高校生が力強くメッセージを送る

11月18日、第13回上智大学全国高校生英語弁論大会「ジョン・ニッセル杯」が6号館101室で開催された。今回のテーマは“Putting ‘For Others, With Others’ into Practice”。全国から238人の応募があり、そのうち第一次審査を通過した21人が本選に挑み、いずれも高いレベルのスピーチを披露した。審査の結果、上位6人と特別賞「英検賞」1人の計7人が表彰された。

優勝した西村理央さん

本選出場者たちと

優勝したのは西村理央さん（広尾学園高等学校2年）。西村さんは近年注目されつつある「生理の貧困」を主題に、地球上にはいまだに生理中の女性を不浄なものとしてさげすみ隔離する地域があること、日本でも生理は隠すべきものとして扱われ、公然と話題にできないことへの疑問を語った。経済的困難を抱える女性へ手作りの生理用品を送るNGOで活動した経験を踏まえ、このような活動は支援を受ける側と行う側の双方の意識を変革でき、単なる資金援助よりも大きな成果をもたらすことができると述べた。

2位は成田萌生さん（青森県立青森高等学校2年）。成田さんは、「共感覚」の持ち主で、自分と周囲がどのようにそれを受入れてきたかを話した。共感覚を個性として自然に受入れてくれた友人を例に、自分たち若者から、多様性を個性としてすべての人を受容する世界を作っていきたいと述べた。

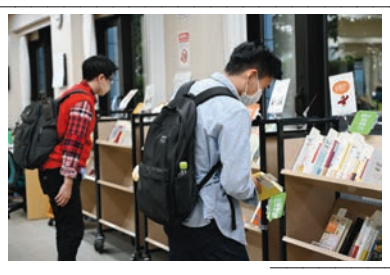
3位は沖縄出身の池原英人さん（国際基督教大学高等学校2年）。米軍基地をめぐる状況と県民が抱く相反する感情について自身の考えを語った。米軍の教会で行った、貧困家庭に新品の靴を贈るチャリティーイベントで、満面の笑みを浮かべ靴を履く少女の姿を目にした経験に触れ、異なる立場の者が互いに思いやり協力し合ってこそ真の平和を築くことができると話した。

出場者全員のスピーチは、本学公式サイトのオープンコースウェアにて公開される。

初の学生選書イベント開催

153冊の図書を選定

10月24日から26日の3日間、図書館では新刊図書を学生が選ぶ学生選書イベント『秋の選書会～Sophians’ Book Select～』を大学後援会の支援（図書購入の寄付金）の下、初めて開催した。イベントには77人の学生が参加し、153冊の図書が投票で選ばれた。得票数の多かった上位5位、13タイトルの図書が11月末まで図書館の新刊コーナーに展示された。



図書を真剣に選ぶ学生

得票の多かった図書が新刊コーナーに並んだ

図書の選び方は、図書館の職員が事前に選定した和書193冊の中からこれはと思う図書を学生が直接手に取り、図書に付けられた番号とコメントを用紙に書いて、1人最高3冊まで投票するというもの。投票の結果、1位に選ばれたのは『366日風景画をめぐる旅』。「絵がきれい」「装丁が美しい」などのコメントが寄せられた。この他に『ＣｈａｔＧＰＴの先に待っている世界』や『全体主義の克服』などが選ばれ、「ＣｈａｔＧＰＴやＡＩについて考えや知識が広がる」「大学で勉強していることと親和性があって面白い」といった意見があった。

図書館担当者は学生に図書および図書館への興味・理解をより深めてもらうと同時に、学生の興味関心を知るために、本イベントを企画・実施したという。「本学は外国人留学生も多いことから、次回はもっと幅広い分野からの図書を対象とし、読みやすい洋書なども加えていきたい」と抱負を語った。

訂正

上智大学通信第472号8面「国際物理オリンピック大会に協力」記事、国立オリンピック記念青少年総合センター所在地について

【誤】（渋谷区代々木神保町）

【正】（渋谷区代々木神園町）